日刊 動労千葉

81.8.4

No. 812

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二-八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

17日間の獄中、完黙闘争を闘って

6名の仲間の報告と決意①

怒りを新たに反撃にたちあがる

津田沼支部乗務員分科会長　深見四郎

七月三十一日、獄中十七日間、警察・検察権力の言語を絶する異常な取調べ体制を粉砕し、完全黙秘を貫ぬいて勝利した六名の仲間はついに奪還された。

これは、動労「本部」の名をもって、コロビ屋・革マル分子＝嶋田誠、斉藤吉司、佐藤次男らのデッチあげ告訴路線をうけた権力の動労千葉破壊策動を、もののみごとにはねとばした一大勝利の闘いであった。この勝利の核心は、動労千葉の「三里塚・反合・動労大改革」を軸柱にした路線的正義性であり、真の戦闘的団結力の比類なき発揮である。

われわれは、この勝利を勝利として確実なものとするために、本号より、六名の同志の新たな決意をここに連載する。六名の同志の獄中闘争でつちかった闘魂をわがものとして受けとめ、自らの体内につちかって、動労大改革へむけて、動労「本部」革マル分子一掃へより一歩前進しよう。

完黙・非転向、6人の同志の勝利の奪還歓迎集会で決意を表明する深見乗務員会長。（7月31日、動力車会館）

七月八日早朝、機動隊・私服らに守られ、斉藤吉司嶋田誠らが、青白いひきつった顔で、身ぶり手ぶりよく現場検証をデッチあげた。それから一週間後、それは突然に組合事務所の家宅捜索に始まった。多数の組合員の見守るなかで、立会人をしていた自分は、権力によって不当逮捕された。

完黙・非転向の闘いを貫ぬく

組合員の抗議と、励ましの声に送られ船橋署に連行されたが、なんと「被疑事実」は三点にわたり、権力の手でねつ造、デッチあげされていた。

「ふざけるのもいいかげんにしろ！」と、のど元まで言葉が出かけたが、彼らの策動に乗ってたまるかと自分に云いきかせ、完黙を貫ぬき通したのだった。

その日のうちに、船橋署から八千代署へ連行され、六名はここで離れ離れにされた。これは弁護士接見、差し入れ、激励行動に対するいやがらせ策動であることはいうまでもない。

二日目、刑事の取調べに黙秘すると、彼らは、「社会党の市会議員の誰れ誰れはおれの仲間だ」などといって、何とかきっかけを作ろうとウソも平気で云ってきた。

そして十七日、われわれは検察庁に連行された。そこで二日ぶりに顔を合わせた仲間は皆元気であった。目で合図をしお互いに頑張ろうと誓いを新たにしたのだった。

恫喝と甘言の取調べを粉砕

十日間の検事勾留が決定され、十七日午後から千葉刑務所内の拘置所に入れられ、翌日から検事刑事の執拗な取調べが始まった。

取調べは、職場、組合、家族、親兄弟などのことでさんざんどう喝をし、一転して「話せば情状酌量してやるから」との甘言を浴びせてきた。

「国鉄二十年の生活もこれで終りだな。これからどうやって食っていくんだ。」

「お前はどうなってもいいかも知れないが、子供たちには何の責任もないのだぞ。女房や子供にどう弁解するんだ。」

「支部の執行委員をしていながら、こんなことにも答えられないのか。組合を脱退しろ！」

「お前は馬鹿で、卑怯者だ！」

怒りで全身がうちふるえた。そして耳に栓をしたい時もあった。心の動揺をソッポをむいてごまかした時もあった。それでも完全黙秘を貫き、頑張れたのは、弁護士さんの「私達を信じて下さい」との言葉が胸から離れなかったのと、何よりも外の仲間の激励があったからである。

おれたちには素晴しい仲間がいる

津田沼支部の第二執行部が確立され全組合員が一丸となって闘いに決起したとの報告、そして各支部の仲間の励ましに胸を熱くする想いであった。

自分達には素晴らしい仲間がいる。だからこそあえぎあえぎやっと自分にとって人生の最大の試練を乗りこえることができたのだ。

いまふり返って考えたとき、権力・当局の先兵となって、動労千葉に対する組織破壊－国鉄第二マル生攻撃の先導役をはたす動労「本部」反動分子に対し、新たな怒りと闘いに決起する闘志がわいてくる。

十七日間にわたり、われわれを支援して下さった各支部の仲間達、そして寝食を忘れて活動して下さった弁護士の先生方に厚く御礼申し上げると共に、動労千葉に対する組織破壊攻撃・八〇年代型の第二マル生攻撃に対し、反撃の闘いに決起することを明らかにします。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！